

余野川ダムは、なぜいらない？ ～河川管理者はダムの操作に本気を見せて～

尼崎市 細川 ゆう子

猪名川には、支流一庫大路次川に一庫ダムがある。河川整備計画原案では「一庫ダムの放流量を 345m³/S とした上で、(狭窄部の) 流下能力を 1700m³/S とし」狭窄部の開削後、下流河川の改修量を、余野川ダムを建設するケース、建設しないケースで検討している。「狭窄部を開削するために必要な下流河川整備の事業費を、余野川ダムを建設するケースと、しないケースで比較したところ、ダムを建設しないケースが優位となった。」と結論している。

第一次流域委員会のダムワーキングでは、ひたすら狭窄部上流、多田地区の浸水被害解消の検討をした。そのときの検討では狭窄部の開削規模が、1100m³/S であった。また一庫ダムの放流量は、現在の操作規則 150m³/S と、220m³/S についてしか検討しなかった。当時の検討では、既往最大の洪水で、どのように対策しても多田地区の浸水被害が解消されないために、既往第二位(昭和 58 年 9 月洪水)を目標洪水とした。余野川ダムは狭窄部より下流で本川に合流するため、ダムワーキングリーダーは「余野川ダムは、上流には不要、下流には無用」と酷評した。

一庫ダムの操作規則には、因縁がある。運用開始時の操作規則では「100 年に一回程度の確率で発生する規模の降雨によってダム貯水池に流入する 1320m³/S のうち、670 m³/S を貯留し、650m³/S を放流すること」としていた。しかし、運用開始直後の昭和 58 年 9 月に、操作規則どおりに放流したために、狭窄部上流多田地区で深刻な浸水被害が発生した。多田地区の住民は「ダムができると水害がなくなると聞いていたのに、上流から波が立ち上がるように襲ってきた。ダムのせいで、急に水が来て被害が大きくなった」と恨む人も多いと聞く。住民の認識が正しいかどうかはわからないが、ダムの放流量に、狭窄部の流下能力が追いつかなかったことは間違いない。それゆえ、一庫ダムは 650m³/S の放流能力を持つのに、150 m³/S しか放流できないでいる。開削により放流量を増やし既往最大まで浸水被害を解消できるという。下流住民としては、開削量が増えたことには不安が残るが、よいことだと思う。一庫ダムもやっと本来の能力を発揮できるのだ。

一方で、2004 年の台風 23 号の時には、こんな出来事があった。円山川・由良川で深刻な被害が発生した 23 号だが、猪名川も狭窄部上流で道路が冠水した。当時の猪名川河川事務所長は、降雨のピークは過ぎたと判断。一庫ダムの放流量を 11m³/S まで絞り、多田地区の浸水被害の拡大を食い止めたという。また、観光バスが立ち往生した緊迫した映像が記憶に新しい由良川上流の大野ダムでは、バスの乗客を救うため、サーチャージ水位ぎりぎりまで放流量を抑えたと報道されていた。洪水のその時、現場の判断はこうあるべきだ。

今回の原案はどうだろう。広い淀川水系が、どこも大雨という状況は考えにくい。降雨はどこかに集中する。集中豪雨の最中なら、一定の放流をしつつ湛水しなければならない。降雨の先が見え下流が危険な状態なら、放流量をぎりぎりまで絞ることもすべきだし、まして降雨がさほどでない別の支川なら、放流量を操作規則どおりに流さなくてもいいはずだ。

原案のなかでも、一番謎は天ヶ瀬ダムだ。天ヶ瀬ダムは、琵琶湖の後期放流のために、再開発し放流能力を上げる。琵琶湖の後期放流のためなのに、下流淀川が計画高水位を超えようという時に、なぜ増えた放流能力めいっばいの1140 m³/S 放流し続けなければならないのか。他の支川のダムも、操作規則どおりに放流すべきではないはずだ。ダムにはゲートがあるのだから、もっと柔軟に洪水に対応してほしい。何も考えずに操作規則どおりにダムの放流をするなら、機械にさせればいい。人はいらぬ。「計画高水位を17cm 超えることが大問題だ」と言うくせに、河川管理者は本気で超えさせない努力をしているのか。数値にこだわって、心を失っていないか？川の水位を下げるために、既設のダムの能力を最大限使うべきだ。洪水ごとに、もっと決め細やかな対応を考えてほしい。今あるダムで水位を下げる努力をせいいっぱいしてから、新規のダムが必要かを検討するべきではないか。まるで、ダムの口実がほしいがために、ダムの放流量を増やし水位を上げていると取られかねないシミュレーションは、やり直した方がいい。

「既設ダムの放流操作を見直して計画高水位を超えなくなれば、ダムをつくる理由がなくなる」と思って言うのではない。去年の二次委員会は、既設ダムのフォローアップもしているのに、今年は別の委員会を立ち上げて、流域委員会にフォローアップをさせないと聞いた。「新たな川づくり」を目指した淀川水系流域委員会の考え方で、既設ダムの運用も考えてほしいのに。一庫ダムのように、能力が十分発揮できないダムをどうすればもっと有効に使えるのか。既設ダムを連携させて最大限水位低減効果のある放流操作をすることも可能なはずだ。

レビュー委員会で、河川管理者は「流域委員会の議論に積極的に参加できなかった」と反省したではないか。三次委員会を立ち上げる時「これからは積極的に議論に参加する」と抱負を述べたではないか。今あなたがたが無口なのは、住民を守るために最善を尽くすという誇りを失ったからではないのか。流域委員会と共有してきた、水害で人を死なせない、被害を最小限に食い止めるためにできるだけのことをするという目的を、思い出してほしい。目的を共有できれば、流域委員会で熱く議論を戦わせることもできる。早く、流量の数あわせから卒業してほしい。